安重根義士の遺骨発掘と遺品・遺物所在把握について

―― 日韓共同作業を日本社会に提案する ――

チョドンソン
趙東成[1)]
（安重根義士紀念館館長）

2012 年 10 月 27 日、市民団体の「韓国併合」100 年市民ネットワークの主催により龍谷大学深草学舎にて、ワークショップ「日本と朝鮮半島との和解の道を探る！」が開催された。ワークショップは、中田光信（日本製鉄元徴用工裁判を支援する会）の司会のもと、第一部「記念講演」、第二部「発題と討論」、第三部「和解に向けての Discussion」の構成で進められた。

ワークショップの第一部では、趙東成（安重根義士紀念館館長）による記念講演があり、続く第二部では、①勝村誠（立命館大学コリア研究センター長）が「安重根の東洋平和論が私たちに示すものとは」と題する発題をし、それを受けて、②戸塚悦朗（元龍谷大学法科大学院教授）がコメントを行った。第三部では李洙任（龍谷大学教授）がコーディネータをつとめ、参加者からの積極的な意見をもとに活発な議論が交わされた。

本稿は、ワークショップの第一部で行われた趙東成氏の記念講演の記録を、「韓国併合」100 年市民ネットワークの許諾を得て掲載するものである。（勝村　誠）

1. はじめに

みなさん、こんにちは。韓国の安重根義士紀念館で館長を務めております趙東成と申します。

まず、偏りのない歴史認識によって韓国と日本の不幸な過去の歴史を正しく見据えようと努力されている「韓国併合 100 年市民ネットワーク」の関係者の皆さんに深い尊敬と感謝の言葉を申し上げます。そして、この場を提供して下さった龍谷大学ならびにご挨拶をいただいた田中則夫副学長先生、ありがとうございます。また、日韓の平和と友好の増進をめざす事業の一環として、安重根義士を新しく評価し、遺墨の展示などを通して安重根義士の思想を知らせるために、多くの関心と努力を傾けてくださっていることにも、安重根義士紀念館を代表する者として、非常に感銘深く、有り難く思います。

先ほど司会の方から、安重根義士の思想についての理解をめぐり、日本ではテロリストだとされ、韓国では義士であると、このような認識の食い違いについて一言ありました。私はこの場で安重根義士の思想やアイデンティティについて話すつもりで来たわけではありませんが、テロリストか義士なのかについては、韓国でも興味深い事件がありましたので、ご紹介したいと思います[2)]。去る 2012 年 4 月 11 日に韓国では国会議員選挙がありました。韓国では、国会議員 299 名のうち 244 名が地域から 55 名が比例区から選出されます。また、韓国のいまの与党はセヌリ党で、第一野党は民主統合党ですが、富裕層が集中しているソウルの江南地域では与党・セヌリ党の候補者は比較的簡単に当選できます。最近世

界的に有名になった「江南スタイル」という流行歌がありますが、まさにその江南地域です。この選挙でセヌリ党は江南地域の公認候補としてベンチャー企業を経営している40代後半の事業家を立候補させました。ところがその候補者は、自分が出版した本の中に安重根義士はテロリストだと評価したくだりがあったことを理由に、マスコミから激しい批判を受けました。国民の間では、彼が安重根義士のことをテロリストと呼んだこと、それ自体についての強い不満がありました。当初、彼は自分の文章について弁明や言い訳をしました。しかし、ある学者が安重根義士をテロリストだとみなすのは間違いであるという根拠をしめすと、彼は自分の考えが間違っていたことを認めて、候補者資格を辞退しました。

その学者はテロリストについての定義を提示したのですが、その定義によると、テロリストとは自分の目的を達成するために、その目的とは関係のない不特定多数の人々、罪のない一般人も巻き込んで殺傷する場合、その行為者をテロリストだというのです。それによって、安重根義士はテロリストではないことを明らかにしたということです。つまり、中東でしばしば発生する自爆テロ事件や、2001年9月11日の「9.11テロ事件」などは、この意味でのテロリズムと見ることができます。一般人を巻き込まない殺害行為はテロリズムとは言えないという定義をその候補者は受け入れて、辞退したというわけです。安重根義士は不特定多数を殺傷したわけではなかった。以上は、私が決して専門的に勉強しているわけではなく、ちょうど6か月前にこのような事件がありましたので、ご紹介差し上げたに過ぎません。では、本題にはいります。

2. 安重根義士紀念館の館長を引き受けた動機

私は歴史学者ではなく、経営学者です。ソウル大学校経営大学で1978年から35年間、学生たちを教えてきました。私は個人的には、安重根義士の母親である趙マリア女史の兄、趙譙恒（チョ・ヨンハン）の曽孫子（ひ孫）にあたります。したがって、趙マリア女史が私の曽大姑母、すなわち五親等のおばあさん（祖父の叔母）にあたり、安重根義士は内再従祖父、すなわち六親等のおじいさん（祖父の従兄弟）にあたります。そのため私は、幼い頃より両親から「家門にこんなに立派な愛国志士がいる」という話を聞いて育ち、常に感謝と矜持を持って暮して来ました。

そのような縁があったので、私は平素から強い関心を持って、安重根義士の記念事業に個人的に参加して来ましたが、安重根義士紀念館の新築再開館をきっかけに、2011年3月に館長を引き受けることになりました。昨年の3月27日には、ここ、龍谷大学でセミナーがありまして、館長として初めての海外における任務としてここに来て、みなさんにお会いしたことがあります。この場を借りまして、あのときにご招待くださったことに感謝を申し上げます。

3. 安重根義挙の性格

昨日、10月26日は安重根義士のハルビンにおける義挙から103周年にあたる日でした。そこで紀念館ではきのうの朝10時から紀念行事がありまして、その行事を終えて大急ぎで空港に向かい、関西空港を経て、京都に到着しました。みなさんがよくご存じの通り、安重根義士は103年前に満洲のハルビ

ン駅で、当時日本の樞密院議長であった伊藤博文を狙撃し、彼を死に至らしめました。事件直後にロシア憲兵に逮捕された安重根義士は、その日のうちに日本領事館に引き渡され、旅順監獄に移されて審問と裁判の過程を経た末に、翌 1910 年の 3 月 26 日に日本により死刑執行され殉国しました。日本の立場から見れば、当時の安重根義士の義挙は総理大臣まで務めた国家の元老を失わせた犯罪行為でした。しかし韓国の立場から見れば、国を失い行く一民族の青年として、余りにも当たり前な、誰でもが行うべき行為でした。それゆえ韓国では、安重根義士の義挙は、日本で最も重要だとされるサムライ精神をそのまま表現する行為であったのではないかという学者もいます。

また、安重根義士の行動は不特定多数の無辜の人命を殺傷した行為ではなく、その対象を最小限に限った行為でありました。したがって、先ほども申し上げたように、テロリストではなくて義士であるという評価があるわけです。また、悲惨にも傾きゆく国を救い、戦争と侵略の渦中にはまり込んだ東洋三国の平和を守るための明確な目的を持った行為でもありました。

安重根義士も公判過程で次のように述べました。「私が伊藤公を殺したのは、韓国独立戦争の一部分であります。また、私が日本の法廷に立つことになったのも、戦争に敗れて捕虜になったからです。私は個人の資格でこのようなことを行ったのではないのです。大韓帝国義軍参謀中将の資格で祖国の独立と東洋平和のために行ったのです」と。このように陳述することにより、義挙が個人の恨みや欲望ではなく、一国の独立戦争のレベルで行われたとはっきりと述べたわけです。古今東西を問わず、数多くの戦争があったことを私たちは記憶しています。このような戦争は、どうしようもなく相容れない二つの正当性の衝突なのだということを理解しなければならないでしょう。

ここでまた、安重根義士がどのような人物なのかについて、二番目の問題が浮上します。一つ目が、安重根がテロリストだったのか義士だったのかという問題だとすれば、二つ目は、安重根は将軍だったのか義士だったのかという問題です。いま韓国では、安重根義士をこれまで通り義士と呼び続けるのか、それとも将軍と呼ぶべきなのかについて議論があり、まだ解決していない状況です。一部では、安重根義士が法廷で、自分は戦争に敗れて捕虜となった将軍であり、そのように呼んでくれと言ったことを遺言として認め、将軍と呼ぶべきだとする主張があります。しかし多くの人は、安重根の活動が軍人的な側面だけでなく、人間としての活動、あるいは若者として、思想家として、様々な側面で、活動した部分があるから、より幅広い意味である義士と呼ぶべきだとしています。一般的には義士という呼称が広く受け入れられていますし、安重根義士紀念館の名称にも義士という呼称を付けています。安重根の思想や哲学、そして日本をどう見ていたのかなどについて正確に解釈を加えることによって、この呼称問題も将来解決するだろうと思います。

4. 安重根は日本と日本人をどう見ていたか

そこで、続いて安重根義士が日本をどう見ていたかについてお話ししたいと思います。第一に、安重根義士は人を恨んだり、国を憎んだりするような人ではありませんでした。もちろん彼は伊藤博文という日本の偉人を殺しましたが、だからといって、日本や日本人を憎んだわけではありません。むしろ、彼の表現や行動を見ると日本という国が好きで、日本人たちを愛していたことがよくわかります。

まず一例を挙げたいと思います。安重根義士は彼が構想し、法廷でも明らかにした東洋平和論において、日本を排斥していません。むしろ、経済的な側面では、日本の指導的な役割を強調するほど、日本の進んだ文物と経済力に友好的な考え方を持っていました。当然、東洋平和論という場合の東洋には日本、韓国、中国がみんな含まれるわけですが、彼は日本の平和的な発展を願う立場をとっていました。

二番目の例を挙げましょう。安重根義士は1909年10月26日に逮捕され、1910年3月26日に亡くなるまでの5ヶ月間を獄中で暮らしましたが、その間、彼は監獄で出会った人びと、すなわち彼を監督・監視するすべての日本人たちと友好的な関係を築き、親しく過ごしました。安重根は、獄中で書いた自敍伝で、「当時、旅順監獄で部長の青木さんと看守の田中さんとは実の兄弟のように過ごした」と記し、尋問をした溝淵検察官と栗原貞吉典獄（監獄長）にも感謝を表現しました。

そして、安重根義士は獄中生活の最後の2か月の間に約200余点と推定される数多くの墨書を書きましたが、その大部分は日本人に書いてあげたものでした。そのうち60点余りの遺墨を集めて韓国で一昨年展示会をしました。そのほとんどは、所蔵している日本人から借りて展示したものです。200点という数字が正しければ、まだ残りの140点は未発見の状態です。もちろん、無くなったものもあると思いますが、残っているとするならば、そのほとんどは日本人が所有しているだろうと思われます。ですから、安重根義士紀念館では、遺墨の発見をこれからの重要な事業の一つとして掲げています。そこで、本日の午前中に龍谷大学の田中則夫副学長とお話をし、安重根の遺墨を探す研究を一緒にしましょうという提案をしました。また遺墨のみならず、最も重要なことですが、安重根義士の遺骸、遺骨がまだ見つかっていません。これも一緒に探しましょうと提案しました。三つ目としては、安重根義士が150日間の監獄生活で暮らしながら使っていた遺品類があったはずですので、それも探したいと思います。龍谷大学にも安重根義士の遺墨が3点ありますが、ほかにも多くの遺墨が日本のあちこちに残存しているのではないかと思います。そこで私は遺骸、遺墨、遺品の3つを一緒に探しましょうと公式に龍谷大学側に提案しました。これに対して田中副学長は長期的に、ただし肯定的に検討したいとおっしゃってくださいました。この場を借りまして、「韓国併合」100年市民ネットワークに参加されている皆様にも、一緒に力をお貸しいただき遺骸、遺墨、遺品を探す事業に参加してくださるようお願いします。

先ほど私が申し上げたように、安重根義士は日本や日本人に対して好意的な見方をしていたのですが、じっさい彼が多くの日本人に揮って差し上げた墨書の内容を見ても、どこのどの一言にも日本人に対する否定的な見方や、自分の行動に対する言い訳や釈明の言葉はありません。むしろ、全く肯定的で日本と日本人がより良くなることを願う切実な気持ちが墨書の一節一節に込められているのです。安重根義士も人間ですから、彼の心の中に日本や日本人に対する否定的な気持ちがもしあったら、それは言葉に現れるはずです。しかし、一言たりともそのような言葉がないことを見ると、彼が日本と日本人に対してどのような気持ちを持っていたのかがよくわかるのです。

三つ目にもっと確実な根拠が一つあります。安重根義士は1908年に沿海州で日本軍と義兵戦闘を繰り広げていました。このときには安重根は義兵部隊の将軍でしたから、ここでは私は安将軍と呼ぶことにしますが、この戦闘で安将軍は相当数の日本軍人を捕虜として捕らえました。部下たちは日本軍捕虜を処刑すべきだと主張しましたが、安将軍は部下たちの要求も顧みずに全員を釈放しました。安将軍が釈放した行為には二つの根拠がありました。第一の根拠は、国際法です。国際法において捕虜収容所が

ない場合には捕虜を釈放しなければならないと定められているので、それに従わなければならないと安将軍は考えました。しかし皆さん、実際に戦闘中に拘束した捕虜を釈放するような将軍がいるでしょうか。私は専門家ではないのですべてはわかりませんが、戦闘中に捕らえた捕虜を本当に釈放した将軍は世界中でも安将軍だけではないでしょうか。ここからは安将軍の原則主義者としての側面が垣間見られます。

また、もう一つの異なる根拠があります。安将軍が捕虜たちを尋問すると、このとき捕虜になった日本の軍人たちが、平凡な農民や商人出身の若者で、招集された人たちだということがわかりました。そこで、安将軍は部下たちに次のように説得をしました。「この軍人たちになんの罪があるのか。彼らではなく、この戦争を引き起こした指導者に責任がある。この一人一人になんの罪もない。この日本軍人一人一人と、我々韓国の義兵一人一人は同じ立場で戦闘に参加したのではなかろうか」と。このような根拠に基づいて、安将軍は日本人捕虜を人道主義的な観点から釈放したのでした。

結局、安重根の義兵部隊は、釈放した日本兵によってその実態と位置が発覚したために襲撃を受け、次の戦闘で大きな敗北を喫しました。しかし、このような事例からも、安重根義士の原則主義者の側面と、人間を尊重する人道主義者の側面を見ることができます。安重根義士は、日本人だからといって無条件に憎んだり、理由なく殺傷したりするようなことはありませんでした。だからこそ、当時、安重根義士に出会った日本人たちもみな彼の志に共感し、深く尊敬していたわけです。安重根義士はまさに普遍的博愛主義者でした。実際に安重根義士が、古今東西にも稀に見る原則主義者であり、人間主義者、博愛主義者であったからこそ、きょうここに集まられた市民ネットワークをはじめとする皆さんも、心を開いて安重根義士を受け入れてくださっているのではないかと思います。

ここでもう一度、安重根義士の人格について考えてみたいと思います。監獄にいる 150 日間、安重根義士はたったの一回も心が揺らいだり、大義を思う心に隙が生まれたりしたことはないと言われています。歴史上の偉大な宗教指導者たちの例を見ても、宗教を確立する過程で、追随する人々の前で、指導者がときに揺れ動く姿を見せるのが通例です。ところが、安重根義士の獄中での言葉や行動を見ると、この人物は本当に人間なのかと思われるほど、人間的に一貫性があり、徹底した意志の持ち主だったことがわかります。その当時は、安重根義士がまだ 30 歳から 31 歳のころのことでした。その若い彼の深い行動と志に対して、もう一度、安重根義士の前に襟を正し、頭を垂れたいと思います。

5. 義挙以後の家族の人生

ここで話題を変えまして、1910 年 3 月 26 日の安重根義士殉国の後に、残された家族たちがどのような人生を送ったのかについて少しご紹介いたします。特に私は親族の一員としてこの部分について考えることが多いのです。疑いなく、安義士の義挙は残された家族たちの人生に大きな影響を及ぼしました。安重根義士が殉国した後、1910 年 10 月頃に、彼のお母さん（趙マリア）と妻（金亜麗）、子どもたち、兄弟（安定根と安恭根）らはロシアの沿海州に移住しました。 最初はコルジポという朝鮮人村で小さな農場を経営していた家族たちは、1914 年にニコリスクに移転して本格的な商業活動と農場運営を始めました。このとき農場の経営は大きな成功を収め、この遠い異郷の地で同胞たちが生活基盤をつくるのに大きく寄与しました。

特に注目に値する活動をした人は、安重根義士の母親である趙マリア女史でした。 安重根義士が死刑判決を受けると、趙マリア女史は安重根義士に次のような手紙を送りました。「正しい事をして受けた刑なのだから、卑怯にも命を求めたりはせず、大義にかけて死ぬことが母親に対する親孝行だ」と。10ヶ月間お腹を痛めて生んだ子どもに対して、「大義にかけて死になさい」と言えるような母親がこの人を措いて果たしているでしょうか。だから、当時新聞には「この母にしてこの子あり」という見出しが紙面を飾りました。この母親は満州、シベリア、東はウラジオストック、西はバイカル湖に至る広大な地域を巡回して、同胞たちの愛国心と独立精神を鼓吹することに努め、同胞社会の鑑になりました。

ニコリスクに定着した家族たちは、日本の影響力がそこにまで徐々に広まってくるや、1920年頃に上海に住まいを移し、当時上海で大韓民国臨時政府を指導していた金九先生と一緒に独立運動に携わりました。同胞社会において精神的な支えとして活動した趙マリア女史は1927年7月に上海で亡くなりました。安重根義士の夫人・金亜麗は、その後も上海臨時政府を訪ねて来る亡命人士たちに宿舎と食事を提供するなど、臨時政府の活動を助けていたのですが、1946年に死亡しました。

安定根と安恭根の二人の弟も上海臨時政府の幹部として活動しましたが、安定根は1949年に亡くなり、安恭根は1939年当時に臨時政府があった重慶で行方不明になりました。安重根義士の直系の孫である安雄浩、曽孫子である安度勇、外孫女である黄恩珠、黄恩実らは現在アメリカで暮らしています。

黄海道地域の両班出身であり、富豪として裕福な生活を送っていた家族たちは、安重根義士の義挙が原因で、以前とはまったく違う、きわめて険しく困難な人生を生きることになりました。しかし彼らはみな、自発的に独立運動に跳びこみ、家族から合計15人の独立運動家を輩出しましたが、一つの家から15人というのは韓国で最も多い数字です。ですから、韓国社会でノブレス・オブリージュを実践した代表的な名門愛国志士家門として位置づけられています .

6.「東洋平和論」の意味と価値

次に「東洋平和論」についてお話しします。安重根義士は獄中で韓国と日本、そして中国の東洋三国の平和に関する文を残しました。ただし、執筆期間が短く、ふだん彼が構想したことが網羅されておらず、序文と前鑑の一部しか執筆されていません。それでも、残された内容だけを持ってしても、彼がどれほど卓越した見識を持って東洋三国の平和を切望したのかが分かります。

東洋平和論は、三国が参加する東洋平和会議の組職、共同銀行の設立と共用貨幣の発行、共同平和軍の編成などが主要な内容です。その後100年が過ぎ去った今日では、国連がありますし、世界銀行やEUなどの国際機関が現実のものとなっていますが、このような実用的で先駆者的な構想が、100年前にすでに安重根義士の頭の中にあったのです。

最近、日韓中三国間の領土紛争が起きています。見方によっては、100年前のこの地域の政治状況がいまになって再現されるのではないかという心配すらあります。こういう時期だからこそ、安重根義士の平和思想をもう一度振り返ってみるべきではないかと思います。

安重根義士は東洋平和論の書き始めに、「合成散敗 万古定理」という文を残しました。それは「合すれば成し、散らばれば敗れることは、万苦に決まった理だ」という意味です。つまり、韓国、日本、中

国の東洋三国が力を合わせて平和を成すときにアジアの平和が成されるということです。小利を捨てて大きな目的に向かって三国が力を合わせるべきだとする安重根義士の平和構想が、今こそ必要だと思います。ですから、この場にいらっしゃる市民ネットワークみなさん、日本のことを考え指導的な立場にあられるみなさんには、安重根義士の考えを研究し、紹介していただきたいと思います。

7. 安重根義士紀念事業の当面課題

7-1　安重根義士の遺骨発掘

最後になりますが、安重根義士紀念館がいま取り組んでいる紀念事業についてお話ししたいと思います。すでにお話ししたように、3つの課題を掲げています。第一に遺骸の発掘です。安重根義士は殉国の直前に「私が死んだらハルビン公園に埋葬し、祖国が解放されたら祖国に返葬してほしい」という遺言を残しました。しかし日本は、安重根義士の死体を遺族に引き渡さず、誰にも分からない場所に埋葬し、現在までその所在は把握できていません。安重根義士が殉国してから 100 年と 3 年が経ちましたが、私たち韓国国民は最も尊敬し、愛して止まない代表的な愛国志士の遺言に従うことができないでいます。

この間、韓国と北朝鮮、そして中国が合同で旅順監獄周辺を数次に亘り調査しましたが、いまだに結果は出ていません。現在、韓国政府は 2010 年に新たに「安重根義士遺骨発掘推進団 」を設立し、安重根義士紀念館も一緒に、積極的に関連資料の発掘と諮問、遺骨発掘を推進する計画をすすめています。この問題は、日本の協力が必要な問題です。安重根義士が人道主義者であったのと同じように、日本側が人道主義的に協力してくださることが、多くの韓国人たちにとっての切なる願いです。韓国国民は、日本がどこかに安重根義士の埋葬場所についての詳しい記録を持っていると信じており、日本が協力してくれれば、この長年の韓国国民の宿願が解決できると信じています。どうか、ご協力をお願いします。

7-2　安重根義士の遺物と遺品の所在把握

二番目に安重根義士の遺物と遺品です。安重根義士は獄中で自敍伝「安應七歴史」と「東洋平和論」を書きましたが、その原本の所在もまだ明らかになっていません。完全な筆写本があるので、原本が存在することは明らかですが、それに関するいかなる情報にも接することが困難な状況です。また、当時の日本の検察の審問記録を見ると、安重根義士が伊藤博文を狙撃した時に使ったピストルと、逮捕当時に持っていた財布、手紙、自作の詩の原稿なども、みんな日本政府で差し押えて保管したとされています。そして、殉国直前まで使っていた硯、墨、筆、寿衣（死者に着せる死に装束のこと）、手錠、その他の物品もどこかに保管されているだろうと推定されますが、その存在が確認されていません。その他にも、受刑生活および死刑執行に関連する日本の報告書や関連写真など、安重根義士に関する多くの資料があるはずです。私たちは、すでに 100 年以上が過ぎた、こうした多くの資料について、日本政府や学界、社会団体、市民ネットワークのみなさんの協力によって、効率的な発掘作業ができると期待しています。

7-3　安重根義士の遺墨の管理

最後に遺墨です。すでに申し上げた通り、安重根義士は旅順監獄の獄中で約200点の遺墨を書いたと推正されていますが、現在発見されているのは58点です。日本国内にも龍谷大学に寄託されている3点を含めて7点の遺墨が所蔵されていますが、先ほどもお話ししたように、未確認の約150点も日本のどこかにあると推定されます。安重根義士の遺墨には、ご存じの通り、彼の不断の平和思想と人道主義精神がよく現われています。その力強い筆づかいには、高邁で屈することのない真っ直ぐな人柄がそのまま現われています。書道の専門家なら一目でわかると思うのですが、安重根義士は遺墨の内容に応じて書体も変えています。贈る相手が軍人や公職者の場合には内容も筆致もきっちりと固く書いていますし、一般人に贈る場合には柔らかい内容を優しい筆づかいで書いています。本人が言いたいことを書いたのではなく、もらいたい人の気持ちに合うように書いています。私は経営学の専門家ですが、今日の経営学で言うところの顧客中心のサービス精神が見て取れます。贈る相手に対する慈しみや哀れみの気持ちがよくわかります。そのような解釈や研究も一緒にできればと思います。そのような素晴らしい作品ばかりですから、所蔵者が希望する場合には、韓国政府が文化財級の宝物に指定するほど、立派な応対を受けています。

私たちが憂慮する点がひとつあります。龍谷大学のように遺墨を科学的な方法で管理してくださる機関については、私たちは安心しています。このことについては、私たちは龍谷大学に感謝しております。しかし、韓国であろうが日本であろうが、所蔵者が個人である場合には、どうしても体系的な保管が難しく、滅失したりや毀損する可能性があるのではないかと心配です。そこでわが紀念館では、遺墨の保管状態をずっと点検確認し、個人所蔵者の保管能力が不充分な場合には、わが紀念館が寄贈を受けたり、本人が引き続き所蔵を希望する場合には毀損された部分の復元を支援したり、保管方法の指導をしたりして、遺墨が良い状態で保存されるように支援して行く計画です。

2010年に韓国に新たに建設された「安重根義士紀念館」は遺墨の原本を常設展示することができる安全な展示空間と、最先端の収蔵庫施設を備えています。ですから、安重根義士が残した貴重な遺墨を適切に保管し、展示するすべての用意ができています。ですから、私たち紀念館の立場では、韓国や日本に散在している遺墨を、我が紀念館に寄贈していただけるのが一番ですが、そうではなくとも賃貸や委託の形式で、可能な限り一目瞭然となるように保管・展示できればと願うものです。紀念館に寄贈される個人所蔵の遺墨は、寄贈者を銅板に刻んで遺墨とともに展示することによって、永久にその大切なお気持ちを称える予定です。

8. 結言

最後になりますが、安重根義士の遺骸発掘と遺品・遺物の所在把握をする日韓共同の作業を日本社会に提案させていただきたいと思います。すでに申しあげたとおり、私たちの課題は、安重根義士の遺骸発掘、遺物と遺品の所在把握、安重根義士の遺墨の管理の3つです。どれをとっても決して容易ではない課題です。しかし私たちは、去る2011年に龍谷大学と協定を締結して、安重根義士紀念事業と各種資料の発掘のために情報を交換し、共同の事業を展開することにしました。この事業の一環として私た

ちはきょう、龍谷大学の関係者を訪問して「安重根義士の遺骨発掘と遺品・遺物の所在把握のための日韓共同研究」を提案しました。日本のなかでも龍谷大学は、安重根義士の関連資料の保有と研究に多くの業績をあげていらっしゃいますので、協力していただければ、このような懸案問題の解決に効果が大きいものと期待しています。

また、正しい視角と歴史観によって韓国と日本の間の友好と関係発展に大きな関心を持って努力しておられる「日韓併合」100 年市民ネットワークのみなさんにおかれましても、この課題に積極的に参加され、日本国内の世論を形成して、政府機関に対してこの課題に積極的に乗り出すよう働きかけてくだされば、大きな助けになることと思います。

安重根義士の遺骸を探し、遺物と遺品の存在を確認する仕事は、当時すべての行政を主管した日本政府の側がその鍵を握っている問題です。「結者解之」という言葉があります。結んだ者がそれを解くべきだ、つまり原因を作った側が問題を自分で解決しなければならないという意味ですが、その面からは、日本にとっての解くべき宿題でもあります。

社会と経済が発展するにつれて、市民社会の意識も発展しています。また、この東アジア地域で発生しているさまざまな懸案問題に対して、共同の利益を増進するためにも、日韓両国の和解と協力が、いつにもまして切実に必要とされる状況です。先ほど田中副学長もおっしゃったように、残念ながらいまだ過去の歴史をめぐって日韓両国間で真の和解が成立したとは言いがたいのです。しかし、韓国の諺に「千里の道も一歩から」という言葉があります。どんなに困難なことでも始めることが重要で、着々と一歩ずつ進んでいけば最後には成しとげられるという意味です。韓国の国民が最も尊敬する愛国志士である安重根義士の遺骸を発掘し、遺品を探し、韓国でそれを展示できれば、そして、すべての国民がそれを見ることができれば、両国が信頼を回復し、隣人として深い友情を積みあげていくために最も相応しい第一歩ではないでしょうか。

私は、ここにいらっしゃる市民ネットワークのみなさんをはじめ、良識ある日本の知性を信じてここに来たのです。ここで、日本のみなさんに「安重根義士の遺骨発掘と遺品・遺物の所在把握のための韓日共同作業」を提案させていただきます。

数年前から、韓国と日本の間の不幸な過去に対して、両国間の和解の道を模索しようと努力してこられた市民ネットワークのみなさんの真摯なる努力にもう一度深い尊敬と信頼の言葉を差し上げたいと思います。また本日、安重根義士についてのワークショップを準備してくださった関係者の皆さんの苦労に感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございました。

〔日本語訳：勝村　誠〕

注

1） 趙東成氏は 1949 年ソウル生まれ。1976 年ハーバード大学で経営学博士学位を取得。現在ソウル大学校経営大学教授。主著に『21 世紀のための経済学』（ソウル経済経営・2006 年）など多数ある。

2） セヌリ党のソウル江南区公認候補であったパク・サンイル（ベンチャー企業協会副会長）が投票日直前の 2012 年 3 月 14 日に公認を取り消された事件のこと。同年 3 月 8 日に発行された自著のなかで「独立軍は小規模テ

ロ団体の水準」であると書いていたことが問題視された。

〈付記〉講演者は安重根義士紀念館とソウル大学校経営研究所の支援を受けてこの講演を準備した。